

# 古代亀卜文化の文字における表現について

― 甲骨文字「船」形偏旁の意味の検討 ―

安 也 致  
徐 海 寧

おそらく世界中いずれの国家と民族にしても、歴史上で宗教が出現しなかった例は無いであろう。人々の恐懼する意識の中で神霊が出現し、且つその神霊が現実の生活に関与できる力を備えている、と認識されると、体系づけられた一連の宗教儀式が出現した。これ等の儀式の具体的な表現形式は、祭祀・法術・巫術等である。これ等の宗教儀式を行なうためには、適切な物を神と人間との媒介者に充てる事が必要である。亀甲を占卜の媒介者とする亀卜こそは、中国古代の巫術に於ける重要な表現形式のひとつと考えられる。

亀卜とは整治済みの亀甲の表面にあらかじめ穴・溝を彫り込み、加熱する事によってひび割れ（兆象）を生じさせ、そのひび割れの形によって未来の吉兆を予測することである。亀が神秘的な媒介物として選ばれたのは以下の様な理由に依るのである。その寿命が長い事。甲羅の構造が天地の構造を象ったと認識されていた事。鳳凰や麒麟と異なり、現実に存在する動物である事等である。


亀卜が生まれたのは原始社会の事であった。司馬遷の『史記』「亀策列伝」には、以下の記述がある。

自三代之興、各據禎祥。涂山之兆從而夏啓世、飛燕之下順故殷興、百穀之筮吉故周王。王者決定諸疑、參以卜筮、断以著龜、不易之道也。

「夏・殷・周三代が興ってからは、それぞれ卜筮に現れた瑞祥があり、それによって国基が定まったのである。夏の始祖禹は、塗山氏の女を娶ろうとしてとうと、その兆は從(吉)であったので、その子の啓が世襲して夏の帝となった。殷の始祖契の母簡狄には飛燕の出来事(燕が落としていった卵を呑んで契を身籠もった故事を指す)があり、とうと順(吉)であったので、後に殷が興隆した。周の始祖后稷は小児の頃から農事を好んで百穀を植え、その兆しは吉であったので、後に周は王者となった。王者がもろもろの疑いを決定する場合には、卜筮を参考とし、著(メトギ、トいに使う細長い竹)・亀甲をもって断定した。これは万世不易の道である。」

この記述から、夏代の大禹により亀卜が極めて重視された事を知る事ができる。夏代には既に、一まとまりの完成した亀卜方法が存在していた事は、文献史料によって明確である。殷墟から発掘された数多くの卜辞史料から見ると、明らかに商代は亀卜の一番盛んな時間であり、殆ど全ての事項の決定に占卜が関わっていた。且つ、卜・宗・史などによって構成された、膨大な宗教組織を備えていた。従って亀卜は、商の時代に政教合一の国家組織の中で重要な位置を占めていた、と考えられる。西周以降は衰退に向かったのである。

亀甲・獣骨を彫り込む材料とし、卜辞を主な内容とする甲骨文字は、現在、中国に於ける最古の文字である。図画から生み出された甲骨文字は、その構造に図画の「視而可識、察而見意」という特徴、即ち象形・指事・形声・会意等の特徴が残されている。文字とは、人間が客観的事物に認識を行ない、生み出したものである。後世の人はこの様な特徴を通じて、それぞれの字符が、如何なる客観的根拠に基づいて作られたのか、先人が如何なる主観に基づき客観的事物を表現したのか、を窺い知る事ができる。

例えば「為」という文字は、甲骨文字で「」と書いたが、これは片手で象を引いている象形であり、当時の中原地方には象がたくさん生息していた事を示し、且つ象を飼い慣らす事を極めて有益だと考えていた当時の社会認識も示唆している。従って、殷周時代の宗教活動の内容を記録した甲骨文字に注意を払う事によって、古代人の宗教活動の一部を把握し、同時に

彼等の宗教に対する認識をある程度理解する事も可能であろう。

「祝」を例として考察してみよう。「祝」は甲骨文字で「𠄎」と書き、人が祭台の側で跪いて天神の加護を祈る姿を表している。頻繁に祭事が行なわれていた事、及びその度に使用された祭台の存在は、祝・宗・祖・祀・祠・祐・福など宗教行事を表す文字によって十分に表現されている。

殷周時代、亀卜は「国之守亀、其何事不卜」(国の宝亀は、何事の卜いにも使われる<sup>(1)</sup>)と言われるほど重要であった。「卜」という字が、占卜時に亀甲表面に現れる横縦のひび割れの形を象った文字であり、卜占の意を表現している事は既に知られている。しかし、亀卜が行われた儀式の様式、及び使用に供された亀甲の様子は、古文字に於いてどの様に表現されているのであろうか？

現在の甲骨文・金文に関する研究状況を見ると、この問題に対する研究は殆ど行われてこなかったと言える。しかし今後は、殷周時代に繁栄した亀甲卜の歴史に相応しく、詳細な研究を行う必要がある。筆者は亀甲卜の歴史を背景とし、文献と考古資料によるこの問題に対する研究成果を報告したい。そして、未熟な見解ながらも諸先生の卓説を引き出す事ができれば、望外の幸いである。

## 《一》

甲骨文・金文には「𠄎」即ち「彤」という文字があり、これは祭祀を行った翌日に再び祭祀を行う意味を示している。この字について、羅振玉氏は「彤」と釈し、唐写本『玉篇』は「彤」としている。また、『爾雅』には「彤、又祭也、商曰彤」とあり、郭璞氏は「書曰高宗彤日也」と述べている。<sup>(2)</sup>

これ等の記述は、彤・彤・彤の三者が何らかの意味において共通する事を述べている。そして、「𠄎」と「公」は同じ声符

であり、「舟」と「月」は同じ意符であることを示唆している。即ち、祭事における「舟」と「月」の間には、何らかの共通点が存在している、と推測する事ができるのである。

「月」は肉辺であるが、甲骨文に於ける肉は「𠂔」とし、家畜の肋骨の形によく似ている。これまでの研究によれば、古代の多くの肉形偏旁の文字は迷信活動と関連していた事が判明しており、その例として祭・腊・媵・胙などを挙げられる。これ等の文字の形状は、古代人が迷信的な活動を行う時、家畜を犠牲とした客観的事実を反映している。

従って、「舟」と「肉」は古代の宗教活動の中には同じ或は似通った役割を持つと言える。両者は共に、天と人の間の具体的な媒介物として利用されたと考えられる。それでは、「舟」という媒介物は結局何であろうか。

まず『左伝』によって薛侯と滕侯の間の尊卑をめぐる紛争をみてみよう。『左伝』隠公十一年には、以下の様な記述がみえる。

十一年春、滕公、薛公来朝、争長。薛公曰：我先封。滕公曰：我、周之卜正也。薛、庶姓也；我不可以後之。

「春、滕公と薛公が魯に来朝して、席次を争った。薛公が、我（こちら）は「夏王朝の時代に」先に封じられた、と言うと、滕公は、我（こちら）は周の卜正（卜官の長）である。姫姓でもない薛の後につく事はできない、と反論した。」

卜正というのは『周礼』に見える「太卜」であり、正は「長」と解釈される。『左伝』における「卜」という文字は、みな亀卜の意であると考えられる。『礼記・曲礼上』には「亀為卜、蓍為筮」とあり、杜預氏も多くの箇所「卜」を亀卜とする注釈を加えている。

また、薛侯の祖先は黄帝の後裔で奚仲とよばれ、姓は任であり、夏の時代に既に諸侯として魯国の薛県で封じられたそうである。しかし、滕公は文王の息子・叔肅時代に諸侯として封じられたので、薛侯は「我先封」と言った。滕公は少しも弱みを見せず、自分が成周の亀卜を掌管する最高長官だから云々と強く主張した。結局、薛侯と滕公の紛争は、最後に滕公の方が勝つたことで終りを告げたそうである。

上述の史料によって、当時卜正官が相当な社会的地位を占めていた事が明確に示された。その事実に基づき、滕という姓氏の文字構造を併せて考察する事によって、古代の亀卜官の具体的な役割を分析できよう。

滕は、甲骨文では未だに類例が見えず、金文では「𠂔」と書く。これは甲、金文における「朕」の書方と類似し、両手の下に「火」の形譜をつける点だけが異なる。古代人はしばしば官名、地方名、国名をそのまま姓とした。『説文』には、「滕、従火国名、姫姓侯爵」という記述が見える。滕侯は国名を姓としたが、滕という国名は、元々は封じられた人物の官職名だったのだろう。『説文』に見える「滕」の小篆の文字構造は、「朕」の下に「水」を配しており、その居住地が水に近か事を示唆している。従って「滕」と「朕」の意味は殆ど一致しているに違いない。

「朕」という文字は、甲骨文・金文に於いてしばしば仮借され、第一人称の代名詞となっている。ある学者は、この字の本来の意味は両手で火、或は器具を奉じて舟の隙間を擧する事、と解釈した。

このような解釈には少々無理があると考えられる。その理由として特に挙げるべきは、「滕」の下の部分に明らかに「火」が配されている事であり、この特徴は以下の二つの推定を可能にしている。

① 両手で奉じているものは炙られており、熱く、細長い形状のものであった。わざわざ「火」が別に配されているので、奉じられている物は「火」ではなからう。

② 両手で器具を奉じて擧する、或いは別の動作を行う事に加えて、火で炙ることも必要であった事を示している。当然、これら一連の動作は舟に関連するものとは考えられない。

それでは「舟」はここで何を示すのだろうか？それは、既に述べた滕侯の職業官名の分析と併せて考えれば、亀卜行事に欠かせないもの、つまり亀ではないかと考えられる。

したがって、「朕」と「滕」という文字の本意は、卜正官が手で加熱された「契柱」を持ち、整治された亀甲を灼き、そこに現れた兆象によって吉兆を推断すること、と考えられる。「一」は契柱、「𠂔」は両手を表し、更に「火」は火で灼くことを

表現している。また、「舟」は灼かれた亀甲である。

また、以下の歴史資料から窺われる灼亀（亀を灼す）の重要性も、滕侯の自ら誇る職業に適っていると見える。亀を灼くことは卜辞で「示亀」、古文献で「作亀」と称された。『周礼・春官』には、太卜が「視高作亀」、卜師が「揚火以作亀」という行為を行った、という記載がある。灼亀は、亀卜の過程で一番重要な一幕であり、位の高い官員の主宰でなければならぬという。卜辞によれば、商代の最高支配者である商王は、常に灼亀の現場に臨席し、時には自らこの儀式を催すことによって、灼亀の重要性を世の中に示している。

後に秦の始皇帝は、数多くの第一人称代名詞の中から「朕」という文字を選び、皇帝専用の第一人称代名詞として使っている。これは上述の理由に依るのであろう。

## 《二》

ここでは最初に、「舟」という文字の意味を明瞭に確認したい。それによって、以下の難解且つ代表的な、「舟」の字形を構成要素として持つ幾つかの甲骨文・金文の文字について、考証と解釈が可能となるだろう。

### 一、「服」

甲骨文では「𠂔」、金文で「𠂔」と書く。「服」の意味に関する解釈は、大体以下の三説に分けられる。

第一は許慎氏の『説文』による、「服、用也。一曰車右駢、所以舟旋。從舟反声」という解釈である。この解釈は、現在から見れば筋の違うものである。

第二は、人が手で他人の頭を押えながら服従させる場面の象形であり、服従させられる人が舟に乗せられている、とする解

積とした。しかし、(服従させる) 人間を責めて舟に乗せる事と、服従させる行為自体との間には必然的な関連がない。従って、このような解釈もつじつまが合わないであろう。

第三は、林潔明、郭沫若両氏の解釈である。即ちこの字の「舟」辺は意味がなく、皿の象形であり、「服」とは人が皿を奉じて仕える場面の象形である、とする見解である。「舟」が船に従うと同時に無意味とする両氏の指摘は、勿論正しいと思う。ただし、「舟」を「舟」とする見方は、適切を欠くのではないかと考えられる。

まず、「舟」は「舟」と違う。特殊な場合に於ては、前者を簡略化して書いた結果後者と同一文字になったケースが、或いはあったかもしれない。しかし、後者が複雑に書かれて前者と同一文字になった、とは到底考えられない。また、甲骨文・金文の中には「舟」を「舟」と積す例は滅多にない。我々は、特殊な性格の強い個別の事例に依拠して、他の多数の事例の性格を概括してはいけない。

仮に「舟」を「舟」と積するとしても、以下の問題が指摘できる。「服」を字形から見ると、それは手で他人の身を押える模様の象形であり、これは明らかに手で人を押す、或は捕まえる場面の表現である。一方、甲骨文では、手で物を奉じる形は殆ど「舟」「舟」として表現されており、単に押える場合と何かを奉じる場合では、手の表現方法が全く違っていた事を示している。

金文の「舟」や甲骨文の「舟」に見える「舟」は、征兆を求める時に使った靈物つまり亀甲であり、拝跪している人物(又は拝跪させられている人物)は、神霊の予示に服従している事を表現しているのである。

## 二、「前」

甲骨文では「前」と書く。金文では「前」と書き、道を表す意符が省略されている。

「前」という文字の本意は前進であるが、その字形によりどのよう理解できるか、という問題に対して学者達の解釈が二

説あった。

第一の解釈は、足で舟の上に立つ様子の象形であり、それによって前進することを表している、という説である。例えば、許慎の『説文解字』には「不行而進謂之埶、從止在舟上」という記述がある。足で舟或は何か他の物の上に立つことは前進の意味とはそんなに密接な関連がないだろう。重要なのは、この解釈は道を表す形符を回避している事である。舟の上に立ちながら道を歩くのは、明らかに不可能である。

第二の解釈は、人が舟のような形の靴を穿いて陸上を歩くことを表している、という説である。<sup>(3)</sup>しかし、船のような靴とはどういふものである。なぜそういう靴を穿くと、ずっと速く、より遠くへと歩く事ができるのだろうか？「舟」の字形で見れば、当時の船は現代の小型木造船とよく似ており、平底で、舳先と艫は共に方形で、やや上にもたげている。こういう形状の靴なら、かなりかさばって重いのは明かであろう。一体どの様にすれば、この様な靴を穿いてずっと速く、より遠くへと歩く事ができるのだろうか。

上述の二説が説得力に欠けるのは、「舟」を船の意味とする固定觀念に束縛されているためである。実は「舟」は亀卜の神靈を表し、「前」という文字は神靈の加護によりずっとたえずに速く道を歩けるといふ人類の認識を反映するものである。

歴史資料によれば、古代人は「道の神」の存在を信じただけでなく、道を歩く時、特に遠い所へ行く前には必ず道の神を祭って無事に行けることを祈ったらしい。『礼・曾子問』には「道而出、告者五日而遍」とあり、清代の孫希旦氏は、自身が著した『集解』に於て「道、祭行道之神于国域之外也」という注釈を附している。

### 三、「受」

「……卜、……受佑又(年)？」とは、卜辞でよく見られる文型のひとつである。それは占卜によって、神靈の加護を得ら



れるか、その祈願が成就されるか否か、という問いの意味である。甲骨文では「受」を「𠬞」と書き、舟に従う。金文も同様である。『説文』によると「受、相付也、從攴、舟省声」である。

「受」に関する解釈には二説がある。第一の解釈は、二人の人間が手で舟を授受する様子を表している、とする説である。第二の解釈は、やはり二人の人間が、舟ではなく容器（皿）を授受する様子を表している、とする説である。

残念ながら、二人の人間が手で舟を授受するのは不可能なことである。「容器（皿）の授受」とする見解は何とか理解できなくもないが、「服」の第二解釈と同じく「舟」を「皿」と誤解している。筆者は「受」という文字の中にある「舟」がやはり亀卜の意を表すと考える。これは、古代人が自分の願望を神霊に伝え、吉兆の順調な実現を期待することを表すのである。

「受」にこのような意味がある為、卜辞の中には「受年」などの記述があったのであろう。願いがあれば必ず叶えられ、叶えれば（神霊が）報告を期待する様を表す文字の構成は、受け・授けるという二つの意を同時に持つ「受」と丁度一致している。

古代人たちは、時空、想像と現実を表現する時には元来自由闊達であったのであり、この特徴は、今日までに発掘された古代人の祭祀に関する実物によって証明する事ができる。

次は字形の一部に「舟」を持ち、しかもそれに対する解釈の無い、或は有っても未だに同一文字と認められていない、甲骨文・金文の二字について論じてみたい。

一、「𠬞」「𠬞」 ある学者は、これを「舩」と釈し、舟が行くことを表すと解釈した<sup>(4)</sup>。しかし、「舟」の下にある「𠬞」を避けて解釈しなかったのは軽率ではないかと考えられる。甲骨文・金文においては「舟」又は「𠬞」に従った文字はただ一つではないため、「𠬞」は比較的固定した組み合わせではないかと考えられる。

卜辞にはこれと関連した史料は二つしかなかった。一例は地名、一例は単語として使っているので、解釈に対して参考にな

らない。しかし古文獻に於いては「口」を口、或は容器の意としており、少なくとも「舟」が口とか器の上にある物とはなかなか理解できないだろう。

この字はおそらく「諭(諭)」であろうと考えられる。『説文』には「諭、告也」という記述が見える。『論語・里仁』にも「君子諭於義」という記述があり、皇侃は「諭、曉也」という疏を附している。従って、この字は龜卜の結果、即ち神の指示を人に伝える意味であろう。

二、「舟」「𦨭」 この字の金文には、異なる字形構造を持つ例が多数あり、舟、戈、之、貝等に従っている。

郭沫若氏はこれを「造」と解釈した。王延林氏もこれに同意し、これら各種の「造」の文字構造の相違は「各文字の対象がそれぞれ異なっていた事を示しているのだらう」と述べている。<sup>(5)</sup>

また、ある学者は「宀川」「比宀」を連なった船、即ち浮橋と解釈した。<sup>(6)</sup>しかし、この字は「宀」に従い、『説文』に於いては「宀、交覆深屋也」と説明されている。また卜辞の中には「𦨭」<sup>(7)</sup>という字があり、人が部屋に居て、人の下に「舟」がある様子の象形である、ともとれる。従って、「舟」「𦨭」の二字を「船」と解釈する事はできないはずである。

上述の「宀」について、唐蘭氏は異なる説を主張した。彼は金文によく見られる「用𦨭王逆宀吏人」という文句を、「用饗王的迎送往來出入的使者」と解釈した。<sup>(7)</sup>同様の内容を持つ他の例では、宀という字を「𦨭」、或は「舟」「𦨭」などと書いている。後者の二つの書き方は卜辞にも同例が見える。

注意しなければならぬのは、金文にはよく見られる、以下の類似している文句である。即ち「用𦨭王逆宀」(『伯者父簋』)と「用𦨭王逆作」(『仲再簋』)である。資料によって分析したところ、両者の文句の意味が殆ど近く、従って、「宀」と「作」の文字の意味もおそらく近いと考えられる。

既に述べたように、古代人は灼龜を「作龜」と表現しており、即ち「宀」は龜卜と類似する意味を持っていたのであろう。

また『詩経・大雅・蕩』には「文王曰、咨咨女殷商、而秉義類。……侯作侯祝、靡届靡究」とあり、孔穎達は「作、祝、詛也」と注釈している。従って、「作」は「祝」とも意味が近いはずである。祝、宗、史と卜は、それぞれ同じく殷周時代における宗教活動の一部であった。

また、「逆」については『論語・憲問』に「不逆詐、不億不信」という記述が見える。『易・説卦』には「数往者順、知来者逆、是故易逆数也」という記述がある。これらの「逆」は皆推測、予測の意を表している。「逆」が「作」「宥」と併用されていた事は、また別の角度で「舟」が吉凶を占う人物（或は物事）に関連する文字である事を証明している。更に一方では、「舟」が持つ亀卜の意味をはっきり説明している。

「舟」は、文字の最初の段階では木造船の象形として使われたが、その後「亀」と仮借された。宗教文化の複雑化及び亀卜文化の発達に伴って、数多くの「舟」形を含め、宗教活動を表す文字が多量に出現した。時代の推移に伴って、商周時代の後に亀卜文化がだんだん衰微していくと、造船技術の不断の発展とあいまって、「舟」は「亀」の意を段々失っていく。逆に、その本来の意味は更に発達して「津」(𣥂)「𣥃」(𣥄)「𣥅」(𣥆)「𣥇」(𣥈)「𣥉」(𣥊)などが出現した。ついには、その仮借の意「亀」を失っている。

しかしどの様な文字にしても、その発展にはみな特有の保守性と連続性があり、「服」「朕」「滕」「受」等の文字は、もちろんその歴史上の発展の一環であると思われる。これら殷周時代の古文字は、数千年前に「舟」が曾て担っていた意義、そして上古時代の豊かな亀卜文化を我々に示しているのである。

安也致 駒沢大学文学部研究員、中国山東大学社会科学部講師

徐海寧 中国山東財政学院基礎部講師

註

- ① 『左傳』昭公五年
- ② 容庚 編著『金文編』（中華書局 一九八五年）
- ③⑤ 王延林 編著『常用古文字字典』（上海書畫出版社 一九八七年）
- ④⑥ 溫少峰 袁庭棟 編著『殷墟卜辭研究——科學技術編』（四川省社會科學院出版社 一九八三年）
- ⑦ 唐蘭 著『西周青銅器銘文分代史徵』（中華書局 一九八六年）